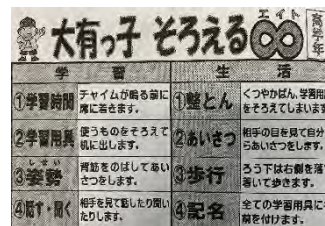


南小たば風通信 2020

旭川市立大有小学校 教育実践研究発表会参加レポート（齋藤）

旭川市立大有小学校で開催された、教育実践研究発表会に参加しました。大有小学校の研究主題は「主体的に学び、関わり合い、学びを生かす子どもの育成～国語科における単元プランの活用と他教科・他領域との関連を通して～」です。大有小学校も学校力向上の指定を受けている学校で、すべての教職員がすべての学級・学年で同じ指導をする「そろえる指導」に力を入れていました。また、初任段階5年間の計画的な人材育成プログラムや、研修手帳、授業の「キホン」というものがまとめられており、学校全体で人材育成に力を入れている様子が見られました。



特設授業公開

1年生国語科「ともだちのことをしらせよう（話す・聞く・書くこと）～生活科と関連させて～」

本時は、前時で学んだ友達へのインタビューの仕方をもとに、実際にインタビューする時間でした。なるべくたくさんの友達にインタビューをしようということで、一人ひとりがチェックシートを持ち歩き、一人に対し、質問できた数が1つだと○、2つだと◎、3つだとはなまるというようにチェックしていました。子どもたちの学習意欲につながっていました。また「友達のお知らせカードを作って知らせよう」を単元の言語活動として設定しており、授業のゴールとして、友達にインタビューしたことをもとにカードを書くことが示されていたので、児童はそれを意識して活動しているように見られました。授業におけるゴールの明確化の重要性を改めて実感しました。



教育講演会

京都女子大学発達教育学部 教授 水戸部 修治氏

「国語科を中核としたカリキュラム・マネジメントと新3観点の指導と評価」

カリキュラム・マネジメントを生かした授業づくりや取り組み、学習評価のポイント、具体的な手立てについての話をされていました。最初に、水戸部先生は「子どもたちに『何を教えるか』ではなく、子どもが『やりたい！』と思えるような単元構想にすることが大切です。」と話していました。

「指導に生きる学習評価のポイント」として、各学年の発達段階に応じた言語活動を着実に実施することをあげられていました。子どもたちが主体的に学習に取り組むために、

- ①設定する言語活動が魅力的なものであること
 - ②子ども自身が選んだり比べたりできること
 - ③子どもが見通しをもち、ゴールに向けて粘り強く取り組もうとすることができる具体的手立てがあること
- の3点が前提だとのことでした。

「日常的な対話・会話を取り入れた学習指導の具体的手立て」としては、「自分の考えをペアやグループで交流しよう。」という指示だと、書いたものを読み上げるだけになりがちになってしまいます。ですが、学年に応じて子どもが伝えたい思いや、はっきりしていない点、意見をもらいたい点を協議によって解決したいという気持ちを重視すると、交流の目的や必要性を実感させることができるそうです。その中で、決められたものだけでなく、子どもから出てきた柔軟な話型を活用することも有効であるそうです。

各教科と関連させ、発達段階に応じた言語活動を設定して、子どもが資質・能力を確実に身に付けられるような指導ができるようにしていく必要があると感じました。